

MASLD 診療ガイドライン 2026 に見る非侵襲的検査の役割

—ELF スコアの活用法—

◎荻原 貴裕¹⁾

シーメンスヘルスケア・ダイアグノスティクス株式会社 LS 事業本部 LS 事業部アッセイラボ&SLS グループ¹⁾

代謝機能障害関連脂肪性肝疾患（MASLD）はわが国で約3,200万人が罹患していると推定され、成人の約4人に1人が該当する極めて頻度の高い疾患である。一方、肝線維化進展例や MASH 患者の診療を担う肝臓専門医は限られており、膨大な患者を専門医のみで管理することは現実的ではない。こうした背景から、糖尿病、高血圧、脂質異常症などを診療する非専門医の診療現場において、進行性肝線維化リスクを有する患者を適切に評価し、専門医療へつなげる診療連携の重要性が高まっている。MASLD 診療ガイドライン 2026 では、この課題に対応するため、非侵襲的検査（NIT: Non-Invasive Test）を活用した段階的なリスク評価が強く推奨されており、臨床検査の果たす役割はますます大きくなっている。

マーカーとして果たす役割について考察したい。血液検査が MASLD 診療にどのように貢献できるのかを理解する機会となれば幸いである。

その中で ELF（Enhanced Liver Fibrosis）スコアは、進行肝線維化リスクを評価する血清バイオマーカーとして国内外で注目されている。ELF は FIB-4 index などによる一次評価後の二次評価法として活用されるだけでなく、近年では治療介入の判断を支援する指標としても期待されている。さらに、MASH に対する薬物療法の進展に伴い、治療前後の線維化リスク変化を評価するモニタリングマーカーとしての価値も高まっている。2026 年に新たな治療選択肢としてセマグルチドが承認されたことで、MASLD 診療は診断中心の時代から治療介入を見据えた時代へと移行しつつあり、海外では ELF スコアが治療対象患者の選定、予後予測、治療効果評価などに活用されている。

本講演では、MASLD 診療ガイドライン 2026 における非侵襲的検査の位置付けを概説するとともに、ELF スコアの臨床的意義と検査室に期待される役割について紹介する。特に、かかりつけ医と肝臓専門医をつなぐリスク評価ツールとしての有用性、MASH 治療時代における治療適応判定や治療モニタリングへの応用、さらに将来的な予後予測・リスク層別化への可能性について解説する。また、ガイドラインで示されている重症化予防による医療資源の効率的活用や医療経済的効果にも触れながら、ELF スコアが単なる線維化マーカーではなく、MASLD 診療全体を支える基盤的バイオ